

先生！
この本
読んで！！

 YouTube

でも聞ける！！



【目次】

1. 『雨ニモ負ケズ』 × 木下校長先生
2. 『蜘蛛の糸』 × 岩口先生
3. 『車輪の下』 × 山根先生
4. 『とりかえばや物語』 × 桃井先生
5. 『変身』 × 山根先生
6. 『吾輩は猫である』 (英語)
× キース先生
7. 『The Tiger Who Came to Tea』
(英語) × コレット先生
8. 『星の王子さま』 (フランス語)
× キャプシーヌ(留学生)
9. 『星の王子さま』 × 山本先生
(日本語、英語、ベトナム語、スペイン語)

宮沢賢治

『雨ニモマケズ』

(1931年)

911/二 『日本語を味わう名詩入門 1』 所収



「雨にも負けず」と言えば「風にも負けず…」と誰もが続けられるほど、日本人にとって最もなじみ深い詩のひとつです。

宮沢賢治は 1896 年、岩手県花巻市に古着屋の長男として生まれました。家庭の事情で苦労しながらも盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）に首席で入学し、土壌学や化学を学びながら、文学や法華経に情熱を注ぎます。農学校の教員を務めていたときに活発な創作活動を行い『春と修羅』や『注文の多い料理店』を発表しますが、当時は見向きもされませんでした。その後、農耕生活を実践しながら夜は音楽界や勉強会をひらく、農民のための協会を立ち上げます。合成肥料の開発・販売のため東に西に奔走しながらも、その無理がたたって結核を患い、1933年に37歳の若さで亡くなりました。

この詩は宮沢賢治の最期の作品であり、また彼自身の人となりを表しているとも言えます。彼は情熱的で、自分のありとあらゆるものを人のために使う、まさに聖人のような人でした。自分の死ぬ時まで人のために尽くそうとした彼の決意に、心打たれるはずです。

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ
丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク 決シテ怒ラズ
イツモシヅカニワラツテイル

(中略)

東ニ病氣ノコドモアレバ 行ツテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ 行ツテ稻ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニソウナ人アレバ 行ツテコワガラナクテモイイトイイ
北ニケンカヤソシヨウガアレバ ツマラナイカラヤメロトイイ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ
ソウイウモノニワタシハナリタイ

芥川龍之介

『蜘蛛の糸』

(1918年)

913/ア (文庫)



『蜘蛛の糸』は、芥川龍之介がはじめて手がけた児童文学です。ある日、極楽の蓮池のふちを散歩していたお釈迦さまは、その池の下にある地獄を覗き、血の池の中で多くの罪人と一緒にうごめく主人公・犍陀多（カンダタ）を見つけました。彼は生前、さまざまな悪事を働いた大泥棒で、糸のような細いものでもつかまって登ることが出来るという特技を持っていました。そして、一度だけ道端を這っていた小さな蜘蛛を助けてやったことがありました。その出来事を思い出したお釈迦様は、彼を地獄から救い出してやろうと思いい、蜘蛛の糸を地獄へ垂らしました。しかし…

作者の芥川龍之介は 1892 年、東京の京橋区に生まれました。東京帝大英文科に在学中から創作を始め、短編小説『鼻』が夏目漱石の激賞を受けました。初期は古今東西の古典を題材にとった作品が多かったですが、後期には自身の人生や人の生死をテーマにした作品へと移行していきました。さまざまなトラブルから心の病を患い、1927年7月24日に毒を飲んで自殺しました。のちに、彼の業績を記念して創設された文学賞が「芥川賞」です。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を

おお

蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました

ようす

た。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、カンダタと云う男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢ごりごいている姿が、御眼に止まりました。このカンダタと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございします。

ヘルマン・ヘッセ

『車輪の下』

(1906年)

943/へ (文庫)



ドイツ南西部のシュヴァルツヴァルトという町に、ハンスという少年がいました。彼は町が始まって以来の天才児と呼ばれており、神学校にも2位で合格します。将来有望とされた彼ですが、しかし入学後、状況が一変します。勉強ばかりしていた自分の人生に疑問を持ち、しだいに落ちこぼれていくようになるのです。一方大人たちは、休暇中も彼に勉強するよう誘導したり、大事な友達から引き離そうとします。人生に希望が持てず、絶望した彼はやがて…

ヘルマン・ヘッセは南ドイツの風物のなかでの穏やかな人間の生き方を描いた作品が多く、自身の得意とする自然画を添えた詩文集も刊行していました。中二の教科書に載っている「少年の日の思いで」も彼の作品です。人間の心情、悩みが繊細にかかれており、共感できる点も多いと思います。

『車輪の下』は彼自身が少年時代に神学校で過ごした経験が作品の素地となっており、その苦しみの表現は思わず胸が痛むほどです。時代も舞台も異なるのに、現代の日本の子どもや教育の問題にも通じるものを感じられる作品です。

どうして彼は、もっとも感じやすく危うい少年時代に、毎日
毎日夜遅くまで勉強しなければならなかったのだろうか？

どうして人々は、彼からウサギを取り上げ、ラテン語学校の
同級生を意図的に遠ざけ、釣りや散歩を禁じ、子どもを疲労

こんぱい
困憊きよえいさせるような、みすばらしい虚栄心から来る、空っぽで

ちっぽけな理想を植え込んだのだろうか？

どうして試験の後でさえ、ちゃんともらえるはずの休暇を
与えてやらなかったのだろうか？

今や過度にしごかれた子馬は道端に倒れ、もう役に立たない
状態だった。

田辺聖子

『とりかえばや物語』

(2009年)

913/夕 (文庫)



「とりかえばや」は平安時代に成立した物語です。しかし、鎌倉時代の無名草子や風葉和歌集によると、それ以前に原型となるものが書かれ、後に書き換えが行われたとされており、前者を「古とりかえばや」、後者を「今とりかえばや」として区別しています。「古とりかえばや」は話の筋があいまいで退廃的と評されあまり好まれず、「今とりかえばや」が現在のとりかえばや物語として残りました。今回は小説家の田辺聖子さんによるリメイクを取り上げます。

時の大納言には二人の妻がおり、それぞれ同じ時期に子を産みました。一人は男の子で、もう一人は女の子。二人の子どもはすくすく成長していきましたが、どういうわけか男の子は女性のように大人しく、女の子は男性のように活発に育っていきました。父は心配したものの、時間がたてばそれぞれの性別らしくなるだろうと考えていました。ところがいつになっても二人の様子は変わりません。父はこのまま娘を若君として、息子を姫君として見守っていこうと覚悟しました。成人の時に二人は入れ替わり、外見と心の違いに思い悩みながらも成長し、恋をします。

「おや、あのいたずら姫が、まりまたもや鞠遊びをしているな」

父の権大納言は、庭にわきおこった子どもたちの歓声のなかに、小さい娘、春風姫の声を耳ざとくききつけた。

立っていつて御簾をくぐり、縁に出てみればーうらうらと春日の暖かな庭先で、七つ八つばかりの少年たち、それにおつきの若者らが、蹴鞠に興じてる。

そのなかにひとときわ目立つ、かわいい男の子ー肩までのびた黒髪をきりりと首すじのうしろで引き結び、白い水干に、括り袴の裾はみじかくたくしあげて、活発に土をけり、鞠をける。おりから庭の桜が満開で、花びらが美しいその少年にふりかかる。「アリヤー」という蹴鞠のかけ声もかわいく、勇ましい。

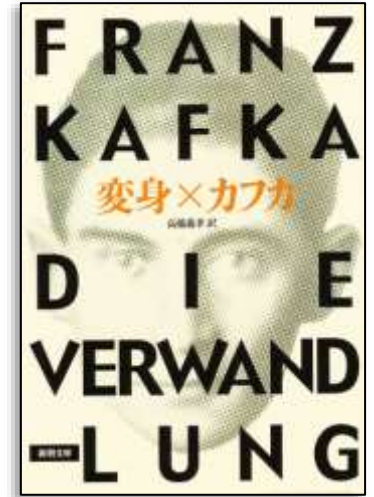
(中略) 美しい少年、と見えるのは、じつは、姫君なのだ。

フランツ・カフカ

『変身』

(1915年)

943/カ (文庫)



「ある朝、目覚めたら虫になっていた。」そんな衝撃的な出だしで始まるのが、異色の作家カフカの『変身』です。

主人公のグレーゴル・ザムザは 20 代の独身サラリーマンでしたが、不安な夢を見て目覚めると、一匹の巨大な虫になっているのに気づきます。なぜ変身したのか？虫といっても蜘蛛なのかムカデなのか？一切の説明はないままに話が進むのがとても不気味です。それまで懸命に家計を支えてきたグレゴールですから、当初のうち母と妹はそれなりに面倒をみてくれますが、父親は虫になった息子にキツくあたり、徐々に雲行きは怪しくなり…作品の解釈をめぐっては今なさまざまな意見があり、謎が謎を生む作品と言えるでしょう。

作者のフランツ・カフカは 19 世紀末、オーストリア＝ハンガリー二重帝国時代のチェコ・プラハで、ユダヤ人家庭の息子として生まれました。法学部を卒業したのち、昼は官僚勤めをしながら小説を書きましたが、作品が世に知られるようになったのは死後でした。シュルレアリスム（超現実主義）を代表する作家とされています。

ある朝、不安な夢から目を覚ますと、グレーゴル・ザムザは、自分がベッドのなかで馬鹿でかい虫に変わっているのに気が付いた。甲羅みたいに関い背中をして、あおむけに寝ている。頭をちよつともちあげてみると、アーチ状の段々になった、ドームのような茶色の腹が見える。その腹のてっぺんには毛布が、ずり落ちそうになりながら、なんとかかかっている。図体のわりにはみじめなほど細い、たくさんの脚が、目の前でむなしくわなわなと揺れている。

「なんだ、これは？」と思った。夢ではなかった。たしかにここは自分の部屋だ。人間が住むにはちよつと小さすぎるけれど、あいかわらず、見なれた壁に囲まれている。

夏目漱石

『吾輩は猫である』

(2009年)

913/ナ (文庫)



「吾輩は猫である。名前はまだない。」冒頭の有名な文章です。漱石の代表作とも言えるこの作品ですが、特にこれといったストーリーはありません。人間生活を「猫」という視点から独特な一人称で吾輩が語っていくだけ。その語り口がたいへんユニークで、かつ画期的です。そして人間に憧れを抱いてしまった吾輩は最後にどうなってしまうのか…予想もしない衝撃的な展開が待っています。

英語版のタイトルは “I am a cat”。とってもシンプルですが、語り口のユニークさは英語でもしっかり感じられます。『吾輩は猫である』は世界中で翻訳されており、中国語では28種類もの翻訳があり、近年ではアラビア語版も出版されたそうです。

人生に対して余裕を持って望み、高踏的な見方で物事を捉える「余裕派」に属した夏目漱石の作品は、達観した視点で描かれるものが多いのが特徴です。人間の内面性や人間関係をリアルに描いた夏目漱石の作品。自分と向き合いたい時や人間関係に疲れたとき、漱石の作品に触れることでヒントが得られるかもしれません。

I AM A CAT. As yet I have no name. I've no idea where I was born. All I remember is that I was miaowing in a dampish dark place when, for the first time, I saw a human being. This human being, I heard afterwards, was a member of the most ferocious human species; a *shosei* ...

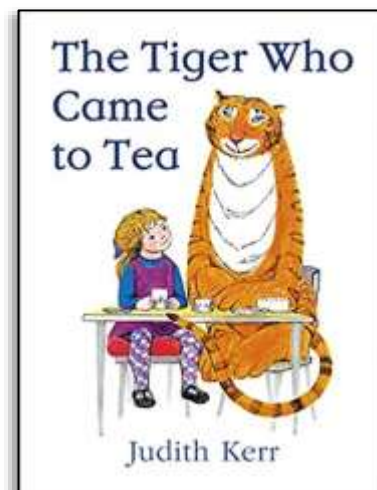
わがはい
吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生しよせいという人間中で一番どうあく獰悪な種族であったそうだ。

ジュディス・カー

『The Tiger

Who Came to Tea』



(1968年)

E 日本語版タイトル『おちやのじかんにきたとら』

「とってもお腹が空いているので、お茶をご一緒させてもらっても良いですか？」そんな風にしてお茶の時間にやってきたトラ。いやいや怪しいでしょ…しかもお腹をすかせたトラって、ちょっと不穏でしょ…。ソフィーのお母さんはこう答えます。「もちろん、どうぞ！」えええ！いいんだ！？家に入れちゃうんだ？トラはサンドイッチやケーキを丸のみし、お茶を飲み干し、冷蔵庫の中身もぜんぶ食べ…

いかにも子どもが喜びそうなユニークな描写と、トラの訪問という予想外の事態にも動じず、何事もポジティブにとらえるソフィー一家が魅力的な1冊。ほんわかとした作品ですが、じつは世界30か国語以上に翻訳され、販売部数は500万部を超えた名作です。

作者のジュディス・カーは1923年、ドイツ生まれ。父親は著名なユダヤ人作家でした。一家は1930年代初めにナチス支配のドイツから逃れ、やがてロンドンに移住します。美術学校で学び、47歳で

絵本作家としてデビューしました。

…Sophie opened the door, and there was a big, furry, stripy tiger. The tiger said, “Excuse me, but I’m very hungry. Do you think I could have tea with you?” Sophie’s mummy said, “Of course, come in.” So the tiger came into the kitchen and sat down at the table.

ソフィーは、ドアを あけました。するとそこには、おおきくて 毛むくじらの、しまもよりの とらがいました。

とらは いいました。「ごめんください。ぼく とてもおなかが すいているんです。おちやのじかんに、ごいっしょさせて いただけませんか？」

おかあさんは いいました。「もちろん いいですよ。どうぞ おはいりなさい。」そこで とらは、だい

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュベリ

『星の王子さま』

(1943年)

953/サ (文庫)



『星の王子さま』といえば、誰もが一度は聞いたことがあるタイトルだと思います。砂漠で遭難してしまった飛行士が、ふしぎな少年「王子さま」と出会い、様々なことを語りあう物語ですね。

では、作者サン＝テグジュベリについては知っていますか？サン＝テグジュベリはフランス出身の元パイロットで、作中に登場した飛行士のモデルは作者自身であるそうです。本の中でもそうであったように、彼は実際 35 歳のときに飛行機で墜落事故を起こし、アフリカのリビア砂漠で遭難しかけています。もしかしたら『星の王子さま』は、実際に作者が経験したほんとうの話だったのかもしれませんが。

さて、今回の朗読は、ネイティブの留学生によるフランス語・日本語バージョンに加え、英語・スペイン語、そしてなんとベトナム語 (!) バージョンでの朗読が収録されており、とても聴きごたえのあるものになっています。世界中で約 200 か国語に翻訳されたうちの 5 か国語ぶんを、ぜひ聴いて&感じてみてください。

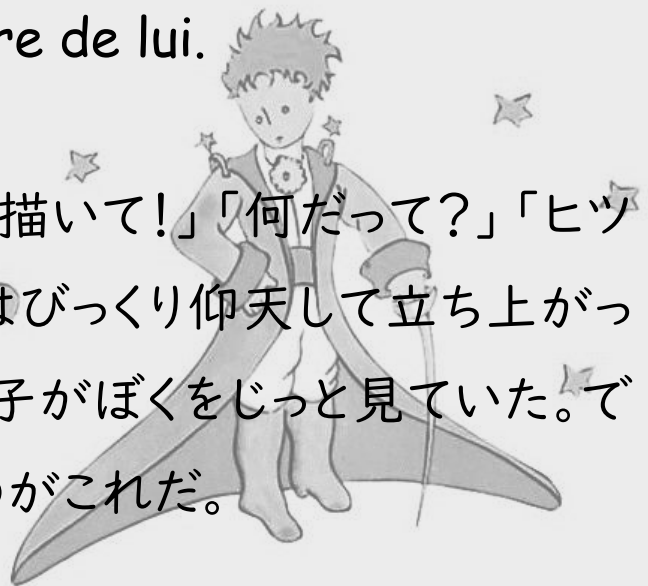
"S'il vous plaît...dessine-moi un mouton!"

"Hein!"

"-Dessine-moi un mouton..."

J'ai sauté sur mes pieds comme si j'avais été frappé par la foudre. J'ai bien frotté mes yeux. J'ai bien regardé. Et j'ai vu un petit bonhomme tout à fait extraordinaire qui me considérait gravement. Voilà le meilleur portrait que, plus tard, j'ai réussi à faire de lui.

「お願いだよ…ヒツジを描いて!」「何だって?」「ヒツジを描いてよ…」 ぼくはびっくり仰天して立ち上がった。見たこともない男の子がぼくをじっと見ていた。できるだけ似せて描いたのがこれだ。



★

And if you find yourself in this place, do not hurry past it. Stop and stand for a moment right under his star! And then, if a child comes to you, and if he laughs, and if he has golden hair, and if he does not answer your questions, you will know who he is. And then, please be kind to me! Make me less sad: write to me quickly and tell me that he has come back...

そしてもしこの近くを通ることがあったら、どうか急がず、この星の真下で少し待ってみてほしい！ もし子どもがひとり、きみたちのほうへやってきたら、そしてその子が笑って、金色の髪で、何かたずねてみても答えなかったら、きみたちにはその子が誰か、きっとわかる。

そのときは、たのんだよ！ 悲しみに沈んでいる僕に、

本企画にあたって

「朗読」は、本に関するイベントとしては鉄板の企画です。

とはいえ、いまどきの中高生にとっては人前での朗読は気恥ずかしく、かといって誰かの朗読を聴く「朗読会」もあまり馴染みが無くて、ピンとこない。それでなくとも何かと忙しい中高生や先生たちを、そういったイベントに呼び集めることは、なかなかハードルが高いように思えました。

そこで、中高生にも取っつきやすく、かつなるべく手軽に実現できる朗読の企画として考え出したのが「先生方による朗読の音声データを集め、CDあるいはYoutube（学園の生徒専用チャンネル）で生徒が聴けるようにする」という方法でした。いわばラジオドラマのようなものです。これならば、多くの中高生が気軽にアクセスすることができ、先生方も都合の良いときに個人の端末で録音してデータを送るだけなので、かなり参加しやすくなります。

しかし、負担が軽くなったと言っても、本当にお忙しい中、私達の願いを快く聞き入れてくださった先生方には、いくら感謝してもし足りません。「あの先生は声が素敵だから絶対に聴きたい」「この先生だったら、きっとこの作品が合うんじゃないかな」と、想像することは本当に楽しく、大いに盛り上がりました。実際にとどいた録音データをみんなでわくわくしながら聴き、そのあまりのすばらしさに「やっぱり先生ってふだん大勢に向かって話しているから、すごい」「この本読んでみたくなる。印象が変わった」と驚くばかりでした。素敵な朗読をありがとうございます。

学園のみなさんが、この企画を通して本や朗読に興味をもってくれたら嬉しいです。

2019年11月 湘南学園中高図書委員会 前期企画班